



## Friends : 友達

Friendsには、ジャンルを問わず宮島永太良の友人知人が登場！毎回、親しい視線と言葉で宮島の実像に迫ります。

**2ヶ月連続で舞台女優の山口晶代さんが出演！**  
**7月は自らの体験を通しての「演じる理由」を、8月は宮島永太良の「言葉」について語ります。**

**8月更新:宮島永太良の「言葉」について▶**

## ◎山口晶代(やまぐちあきよ)さんプロフィール

茨城県日立市出身。6月9日生まれ、双子座、B型。  
 99年に前進座を退座。  
 以後、フリーの舞台女優として活躍。  
 近年はシアターX[カイ]名作劇場に連続出演中。  
**【シアターX名作劇場/出演代表作】**  
 2008年02月:宇野信夫作「催(くるま)」おすえ役  
 2009年01月:伊藤左千夫作「野菊の墓」主役・民子役  
 2009年09月:池田大伍作「根岸の一夜」遊女・薫役  
 2009年10月:黒田玄プロデュース「宵闇せまれば」月子役  
 2010年03月:室生犀星作「茶の間」主役・おつや役  
**出演予定の次回作**  
 2010年08月31日～09月5日  
 第31回シアターX名作劇場:灰野庄平作「芭蕉と遊女」主役・小萩



## ◎舞台女優 山口晶代さん



年子の弟がいて普通のサラリーマン家庭に育った私が、人前で演じ始めたのは小学校5年生の時。授業のひとつ『クラブの時間』で、何となく演劇クラブに入ったのがきっかけでした。当時、得意科目は音楽で勉強はあまり好きではありませんでしたが、演劇には不思議と最初から一所懸命になれました。理由はわかりません(笑)。

そしてクラブ長になった6年生の時、『クラブの発表会』のため、休み時間も返上して下級生を集め、稽古を繰り返し、本番を迎えました。当日、新入で顧問の若い女の先生はお休みでしたが、それも気にせず全校生徒が集まった体育館で精一杯演じました。観客が、声ひとつもたてず見守ってくれたことがとても嬉しく、私にとっては素晴らしい舞台でした。そのうえ、翌日には登校した顧問が校長室に呼ばれ、誉められたほど先生の間でも好評でした。顧問の先生も校長の賛辞に余程嬉しかったのでしょう。放課後に演劇クラブ全員を集め、ひとりひとりにイチゴのショートケーキを配ってくれました。学校で先生からケーキを貰えるなんて想像もできなかったので、嬉しかった♪それが女優になる小さな一因(笑)。そして、本気で将来進む道を決めたのはケーキを持ち帰った夜のこと...



食卓を囲みながら、私は有頂天。満面の笑みで家族に向かって楽しかった一日の出来事、夢は女優さんと、女の子らしいお喋りを楽しんでいます。ところが、今考えれば、ひとり娘を思う親心から、普段は優しい父も何時にもくどい声で『簡単に女優にはなれないぞ！』と、大きな雷。私も何事にも必死に言い返しましたが、叶はずがありません。泣きながら心で女優になること誓い、涙のまま寝入ってしまいました。

でも、その後も気持ちは変わらず、中学でも不良のたまり場の演劇部に入り、ひとりだけいた真面目な先輩と部を改革。私は『夕鶴』のつを演じ、部長にもなりました。高校では、学校の演劇部と地元劇団に所属。本当に明けても暮れても演劇、演劇の日々。でも親は、将来安定した平穏な生活を送ってくれることを望み、私の強い思いとは平行線でした。しかし、高校生の私は両親を説得して演劇科のある大学への進学を理由に上京。受験はうまくいきませんが、高3の夏冬、東京での講習でお世話になった俳優の瀧美園泰先生のアドバイスで前進座の養成所へ…。そして1年後、入座試験にもなる卒業公演では主役を務めました。生意気にも私から入座を拒否。前代未聞と言われましたが、翌年考えを改めて前進座に入りました。



それから約6年間お世話になり、その間、舞台上で大きな役はつきませんでした。良い経験が積めました。旅公演では沖縄以外日本全国を回りましたが、若手ですから舞台でも何役もこなさず、自らの演技を突感することなく、先輩の世話や雑用に分け暮らした。仲の良い友だちに3ヶ月間も会えなかったこともあり。ただ、私に欠けていたお茶の入れ方、目上の方への接し方、着付け等日常的な所作が身に付いたのは、女性としても良かった。

思えば、現在の演劇の素地ができたのもあの時代でした。ある深夜、テレビで瀧戸内晴美さんの作品を『ひとり語り』する番組に感銘を受け、翌日、必死で作品名を調べ、夕刻には古本屋で原作を手に入れた。作品の内容は約20ページあり、語りによると約40分、暗記するのは無理かと思いましたが、それ以後、毎日コピーを持ち歩き、時間があれば暗記。半年続いたら、語りができそうな感じ。それで、入座5年目の発表会で試み無事達成。その時、他の座員はグループで、私だけがひとり演じましたが、充足感も格別でした。以前から言われていた集団のカラーに染まらないう『晶代ワールド』が少し顔を出したのかもしれない。

その翌年、前進座を退座したのですが、辞めた2週間後に、喫茶店を借り友人、知人向けに初の自主公演を企画。早いスタートと言われましたが、演目は頭に入っている瀧戸内作品と自作の『無垢の涙』でした。ところが、公演直前に諸事情で瀧戸内作品ができなくなってしまい、代わりに、やはり瀧戸内さんの『冬薔薇』を朗読。そして、この作品との出会いが、後に大きく影響するのですから、人生は不思議。



退座した翌年の晩秋、前進座京都が可愛がっていたいた有馬稲子さんの付き人として京都・南座の長期公演にこー絡しました。有馬さんはいつも楽屋に一番乗りして、毎朝全ての台詞を一通り練習してから舞台上に臨みます。その有馬さんに、当時、公私共にうまくいってなかった私が『女優、思い切って辞めようかと思えます』と、相談したのですが、返事は『そうね』の一言。その言葉に触発され、やりきっていないことにチャレンジしてからもう一度考えてみよう、懸案だった『冬薔薇』の暗記を開始。

暗記するのに選んだ場所は、南座から程近い冬の気配が少し漂う鴨川の河原でした。三条から五条の間を時間があれば、毎日歩きながら真剣に覚え直しました。そして、練習用のコピー用紙が風に吹かれポロポロになった頃、以前より長い作



品を短い期間で暗記することができました。しかし、それ以後も全てが順風満帆とは行きません。仕事に来ない辛さも味わって来ましたが、お陰さまで昨年は6本の舞台に出演することができました。



▲CLICKで拡大表示(PDF)

その私に『女優の魅力』とは何かと質問されることがあります。正解はないと思いますが、最近、少しだけ答えがわかりました。苦しい稽古の末に舞台上立つ素晴らしさ、そして観客の皆様からカーテンコールの拍手を受ける快感、その魅力はももちろんあります。でも、それだけではありません。例えば、今年3月、初舞台化された室生犀星の『茶の間』で主演のおつや役を務めました。私はいつも上演前に原作者のこと調べます。室生犀星は不幸な生い立ちで命を削って書いていたことがわかりました。だから、その気持ちを私なりに推し量り、心に受け入れて愚直に表現できればと、舞台に立ちました。それができることが、私にとっての女優の魅力です。そして、いただく役についても縁があるから来たと考えようになりました。まだまだ人生では色々なことが待ち受けているはずですが、でも私はこれからも女優として一歩一歩楽しみながら演劇の世界を歩いて行きたいと思っています。

▲ Page Top

## ◎舞台女優山口晶代さんが、今月は宮島永太良の「言葉」について語ります。

宮島永太良さんと知り合ったのは、今から数年前のこと。当時の住まいから便利な代官山にあり、宮島さんも運営に関係していたトリップアートギャラリーが「Tシャツデザインコンテスト」を開催。締切り直前でしたが、そのことを偶然、雑誌で知った私が応募。幸い上位に入賞したのが始まりでした。私、子どもの頃から絵に興味があり、現在の美術モデルもしているため絵画鑑賞は好きですが、それまでは遊び以外で描いたことはありませんでした。でも、コンテストを知る直前に行ったスペイン旅行で強烈なインパクトを受け、そのイメージをある方に頼まれて描いたのがきっかけでした。もし、あの時、情熱的な女性の横顔にアクリルで描き加えて応募していなかったら、今の様に宮島さんと私、互いの表現活動を認め合う親しいお付き合いはないわけですから、人の縁は本当に不思議。



最初に宮島さんの作品を見た時は、既成概念にとらわれないフレッシュなイメージを受けました。絵を見る時、私は『台詞』と言う『言葉の世界』に生きている女優のせいか作品内容を自分の言葉にしたいと納得できるような感じがする。だから、展覧会で作品を見るときは、わかっていること言いたい、納得する、自分自身が解釈をするためにかなり時間が必要になります。しかし、宮島作品には一緒に言葉が添えられていたので、私にとっては親しみやすく、新鮮な一体感を感じ、初めから作品に溶け込むことができました。



作品内容も興味深く、一見すると大人しい坊ちゃん風な宮島さんの外見とは違い、美しさを追うだけでなく、生きることへの問いかけ、美しさへの敬意、他者に対しての大きな慈しみ、人間愛が漂う宮島ワールドを絵で表現。そして私に彼独特の心に染み入る言葉が加わって、もっともっと私を奥へ誘ってくれました。その魅力的な絵と言葉で構成された作品群から30編選び、初の詩画集として08年2月に出版されたのが、『妙な絵物語』。

発売後、すぐに読みましたが、宮島さんの気持ちが素直に心に響いたのをよく覚えています。

掲載された作品をひとつ紹介します。

題名は、『代われるものなら 代わってあげたい』

お腹がいたい？  
 代われるものなら代わってあげたい。  
 頭がいたい？  
 代われるものなら代わってあげたい。

だけど私は代われない。  
 心がどんなにあなたと同じでも  
 体だけは違うのだから。

あなたは私がついていない、  
 素晴らしいスタイルを持っているよね。

世の人はあなたを  
 「抱きしめたいと思うだろう。  
 それを嬉しいと思うのなら、  
 これから先も自信を持って生きていってほしい。

私が代わることのできないその体を  
 もっともって磨いてほしい。  
 それは痛みにも耐えるのと同じくらい  
 辛いことにも耐えるのと同じくらい。

でも、そんなあなたに会えなくなったら、  
 私はもっと辛いんだよ。



実は、一番感銘を受けたこの作品をはじめ『妙な絵物語』から8編を選び、08年5月10日、トリップアートギャラリーで、私は万城目純さんの演出で宮島ワールドをひとり演じました。公演前には宮島永太良さんからお話を伺い、作品について話していた。『代われるもの』の真意は特定の人の、例えば、恋人へのメッセージではなく多くの人々への呼びかけだと聞き、納得。加えて桜好きで、数年前の桜が咲く頃に同年齢の親友を亡くした『私』の外にはいつも風景がのびたつが、実は宮島さんの中でもつなごうとしたことがわかり、ひとり語りをする好きな瀧戸内作品同様、宮島作品を暗記。でも、学生時代には嫌いな授業は全然頭に入らなかったけれど、好きな言葉は無理なく自然に入るのだから女優である今の自分が面白いと思います(笑)。公演当日は宮島作品を背景にして2度の舞台上演に務めることができました。お客様からも暖かい拍手をいただき、最後の挨拶で宮島さんが、『私の描いた作品が、人にとっては違う意味で評価される』と、語った言葉が印象的でした。それは、私が行っている演劇をはじめとした表現行為、芸術全般に通じることだと思えます。

モノを創作する立場になると、悩んだり迷ったりすることもあります。その心情を共有できる人が近くにいると安らげます。でもね、あのTシャツデザインコンテストから、こんな風になるなんて想像もできなかった。素直な出会いで本当でありますね。これから宮島永太良さんも私のこれまで同様。道を通り歩いて行くとありますが、お互いが常に刺激しあえる関係を保っていれば嬉しいし、また、何かでこー絡できれば楽しいですね。

宮島さん！ 素敵な作品、お待ちしておりますよ(笑)。



▲ Page Top

by Sekikobo